

史遊サロン通信

No.268号
平成31年
1月5日

編集
042-754-9360
arai-hiroshi@
jcom.home.ne.jp
新井宏

新年の史遊サロンは 三時半開始です。

今年度の新年の会で、「史遊サロン」となつてから三年経ちました。当初、漠然と目標にしていた線で進んでいて、ほっとしています。

ところで、まず最初にお知らせしなければならぬのが、一月のサロンの開始時間が会場の都合で、いつもの三時ではなく三時半となっていること。会場はいつもの銀座ルノアール八重洲北口会議室で、変更はありません。

三月の史遊サロンも予定通り第三土曜日の三月十六日ですが、会場の都合で開始が三時半になります。
「自由執筆」については、随時お寄せ下さい。「埋め草」も大歓迎。

今二六八号も十頁立てになりました。今までの実績を見ると十頁を割ったのは一回だけ、ご協力を感謝いたします。

さて、歴史に遊んでいる者としては、激変する国際情勢を同時進行で見ることができるのは至福のことです。

予想通り、韓国の文在寅大統領は、もはやレームダックです。当初からのあまりの支持率の高さにおつかかなびつくりしていて、批判を控えていたマスコミも、今では、外交面も内政面も経済面も道義面も支離滅裂だと騒いでいます。

そうなるの色々な話が出てきます。極端な左志向であった盧武鉉大統領が、政権後期には、支持層の猛反対を抑えて米国との自由貿易協定、トルコ派兵、濟州島の米軍基地などを進め、韓米関係を修復するとともに、経済成長の基盤を作りました。今やその貿易自由協定を米国から破棄されるのを恐れているのが韓国です。

当時、盧武鉉に次ぐ力を以て参謀役を務めていたのが文在寅です。いま文在寅は盧武鉉を自殺に追いやった元大統領の李明博らに過酷な仕返しをしています。

ところで盧武鉉の文在寅に対する評価は「参謀としては優秀だが政治家には向かない」ということでした。政治は「妥協」の世界なのにそれができない。

文在寅はがちがちの原理主義者で、かつての朱子学原理主義を想起させます。

全ての政策が理想に彩られた原理主義から提示されました。そのため、ポピュリズム的には人気がありました。そのため、現実には逆に動き、混乱を生み続け、何ひとつ成果は生まれませんでした。

北朝鮮と米国の間で御者台に乗って引つ張ってゆくと豪語しましたが、今や国際的には冷笑され、米国にも疎んじられ北朝鮮からも見捨てられています。

そもそも「その喧嘩、俺が預かる」と言えるのは、清水次郎長のように、両側よりも強い立場でなければ、成功しません。それが歴史の教訓です。

(新井 宏)

出雲大社再考 (二二二)

神仏習合期の混乱 (1)

祭神はスサノウ

村上邦治

インドで生まれた仏教は各国で広まると、その国の土着した宗教を包括して行った。わが国も奈良期から近世にかけて神道は仏教と習合し、神仏は一体とする本地垂迹説が広まる。天照大神は大日如来 (または十一面觀世菩薩)、大国主命は大黒天、スサノウ尊は牛頭天王 (または薬師如来や蔵王権現) の垂迹神とされた。わが国特有の神々は、仏や菩薩が衆生を救済するために姿を現した仮の姿 (垂迹) とするものである。仏教は既に一千年の歴史を持ち教義が確立しており、神道は対峙できなかつた。仏教優位の神仏習合は結局千年続き、明治維新の神仏分離令まで続いた。

こうした時代には今日では考えられない、とんでもないことが起きた。

由緒ある神社にも寺院の支配を物語る別当寺 (神宮寺) がおかれた。大社の別当寺とされたのは、東方一〇キロにある山陰屈指の名刹天台宗浮浪山鰐淵寺であった。この寺には白鳳期の銘文が刻まれた像高八〇cmの銅造觀

音菩薩立像 (重文) が残されている。島根半島の最高峰鼻高山の北山中にあり、寺まで幅の狭い道と小川が並行し、周りは鬱蒼とした木立に囲まれている。寺内は百人の石段を上ると本堂の根本堂があり、さらに高さ十八メートルの浮浪滝と、その中ほどに蔵王権現を祀る蔵王堂がある。紅葉期には深紅のみみじの名所として多くの觀光客を集める。

大社の祭神が大国主命 (大己貴命) であることは、『日本書紀』で明らかであるが、平安期よりいつの間にかスサノウに入れ替わった。明治編纂の『古事類苑』によると、『先代旧事本紀』以降としている。

祭神変更のもっとも有力な説は、出雲国造自ら替えたのではないかというものである。出雲臣は意宇郡を本拠地とし郡司の長である大領であり、出雲国筆頭の熊野大社 (祭神スサノウ) と次位出雲大社 (祭神大国主) の神官を兼ねていた。しかし九世紀には大領と熊野大社神官を解かれ、西のはずれの出雲大社に専念することになった。

熊野大社の祭神は天神スサノウであり、出雲大社の大国主は国津神 (地方神) である。国造としては何としてもこの格差を無くすため、天神スサノウに替えたというものである。

祭神が天神に替わったことから、神階は次第に進み、ついに八五一年には、熊野神・杵築神 (出雲大社) の二神に「特加」として従

三位になった。一六年後には熊野神より上位の、正二位まで異例の昇進を遂げた。

まさにこの時期神仏習合が進む時であり、中世神話といふべき習合神話が誕生する。

「釈迦が法華経を初めて説いたとされる霊鷲山の一部が砕け落ちて、海にただよっていたのをスサノウが引き寄せ出雲の国造りを行い、その引き寄せたところ (島根半島浮浪山) に社殿を築いた」というものである。鰐淵山は浮浪山と呼ばれ、スサノウは寺の本尊蔵王権現の化身とされた。

この説話によりスサノウを祭神とすることが定着した。戦国期には尼子氏や毛利氏の支援を受け幾度も遷宮を行ったが、戦国大名としても優しい大国主より、荒々しく行動するスサノウが祭神であることを望んだ。本殿は朱色に塗られ、仏教色の濃いものとなった。

祭神が大国主命に戻り、現在見る本殿に建て替えられたのは、徳川幕府が全額拠出し正殿式による遷宮を行った一六六六年であった。伊勢神宮でさえ習合中であり、これがわが国最初となる神仏分離の事例となった。

現在も毛利氏が寄進した銅鳥居の銘文中に祭神スサノウと記されている。歴史好きがこの箇所を触るのであるう、少し変色している。

参考文献

『出雲大社の謎』 瀧音能之 朝日新書

今年読んだ本の中から

平山 善之

① G・アリソン『米中戦争前夜』

ダイヤモンド社 2017・11.

原題は「Destined for War」。訳は際物的。

著者は、米中はスパルタ対アテネの如く戦争に向かう宿命にあるが、これからの戦争は人類の終わりを意味するから、絶対に回避しなければならぬ、という。そして「アメリカの指導者はキューバ事件のケネディと同様に賢い選択をするためには、猛烈に考え、猛烈に努力する必要がある」として具体的な提案をトランプ大統領と習主席にしている。

就中、両国とも国内の最重要課題が「政治システムの破綻」であることに気づくべきで、その為にはツキシデスの「ペロポネソス戦史」を読むことが「最高の出発点」という。

しかし、トランプは本など無縁で、猛烈に行動するだけの人のようにみえるし、中国は破綻回避の最高策が「愛国心を煽ること」であることを考えると、読者は悲観的にならざるを得ない。

② 山田泰司『食いつめものブルース』

日経BP社 2017・11.

著者は中国の大学に留学し、現在、上海に居を持つフリーライター。中国の農村出身者の姿を描いた。

格差社会は日本でも欧米でも拡大しつつあるという。しかし、ここに描かれた格差はまさに中国的で頂上と底辺の違いは日本では想像もできぬほど大きい。しかも底辺の人口は副題に「3億人の中国農民工」とあるように桁違いに大きい。この層は「以前より良い」「明日には自分の番が回ってくる」と考えて暴動を起こす気はないらしい。しかし、格差は固定化しつつあるというし、経済的にも底辺レベルアップの余裕が無くなり、大都市に

「食いつめもの」を受け入れる余裕がなくなつた時、どうなるであろうか。共産党政府の常とう手段は外に国民の目を向けさせる事である。日本、韓国、アメリカは常にその標的となる危険にさらされる。全く憂鬱な隣人で、我々は覚悟し備えざるを得ないだろう。

日本国内にも格差はあるが、差の程度も底辺の数もマイルドで腐敗も少ない。中国から学んだ儒教と固有の武士道精神が、マルクス理論をしのぐ成果をもたらした。

③ M・クレフェルト『新時代〈戦争論〉』

原書房 2018・5

著者はイスラエル在住の軍事史・軍事論

専門家。クラウゼヴィッツ、孫子にならつてこの本を書いた。現代の戦争の特徴は

- 1 核戦争
- 2 非対象戦争
- 3 サイバー戦争

であるという。大国間の核戦争は人類滅亡であるから、起さない、と楽観的である。しかし、金正恩のような狂気の男もいるから、楽観はできない。

いま世界中で起きているのは非対象戦争、即ち内戦、ゲリラ、テロ等だが、原因は政治権力、民族対立、宗教など、古来変わらない。原因が変わらない以上、戦争はなくならない。つまり、今日のような争いは向こう数百年は変わらないであろう、と私は考えている。民族意識がなくなり、宗教が互いに寛容になり、人間の本性が変わって権力欲や金欲がなくなる、という世は、近い将来では考え難い。

私が最も興味をひかれるのは、3のサイバー戦争だ。大国の武器もそれ以外のシステムもコンピューター制御されている今日、システムそのものを攻撃できるとは、なんと恐ろしいことか。しかも核と異なり「人類滅亡」の意識はないから、常に起こり得る。しかし、本書はやや軽視しているように思える。

縄文(文化)に思う ……

『縄文文化が日本人の未来を拓く』

(小林達雄著) 読後感

諸橋 奏

「読み書き算盤」育ちの昭和一桁世代にとって、「本が売れない、出版不況」の昨今は、いささか寂しい。

ところで、縄文研究の第一人者・小林達雄 國學院大学名誉教授の近著『縄文文化が日本人の未来を拓く』(徳間書店 二〇一八年四月三〇日刊)は、退官十年目の出版で、著者の集大成的作品であろう。発売早々 amazon 一位(2018.5.16~5.21 (カテゴリ・考古学))、八月に重版とのことである。偶々、上野の東京国立博物館で「縄文」展(七月三日~九月二日)が、また文化庁がパリ日本文化会館で開催中の「縄文展」に高校生ニッポン文化大使を派遣するイベントを実施するなど、よいタイミングであった。

この『縄文文化が……』の要旨は「日本文化は今、世界的に注目を集めている。それは欧米や大陸の国々の歴史にないユニークな文化「縄文文化」という一万年以上にわたる「自然と共存共生」した歴史をもっているからである。

新石器革命で「農耕・牧畜」とともに定住するようになった大陸側の人々は「自然」は征服、開墾すべき対象であった。

一方「縄文の定住革命」は「狩猟、漁労、採集」の生業なりわい三本柱により自然と共生、その秩序を保持しつつ自然の恵みを利用するという作戦、名付けて「縄文姿勢方針」を一万年以上実践継続。その文化が、現在に「縄文の文化的遺伝子」として日本民族に色濃く受け継がれているというものである。

また「農耕とか栽培とか農業とか、この辺はきちんと区別しておく必要があり、縄文は農耕とは無関係で、いろいろなものを栽培はしているけれども、栽培イコール農耕ではない」と。

この「自然と共存共生した」縄文と「自然を克服する」大陸文化(ヨーロッパ、中国大陸側)。大陸側の新石器文化が、農耕(牧畜)を契機に飛躍していくのに対し、「縄文文化は農耕とは、無縁であった」について熊本大学小畑弘己教授は「植物学があまりにかけた縄文時代の植物栽培」で「縄文人を「高度な狩猟採集民」ではなく、「狩猟栽培民」と呼ぶ」ことを提唱している(『季刊・邪馬台国』平成三〇年七月 梓書院)。

また、井口一幸(日本ペンクラブ会員 史遊会前編集委員)、蜂矢敬啓(日本ペンクラブ会員 史遊会顧問)はその共著『縄文以前の

日本列島の謎』で「栽培、漁労による食料の収穫は、自然物の採集、狩猟だけでは集落の人々の食生活を満たすことができない、そうした不安定な生活を補うために行なわれた生活の知恵とも言える。もつともこの時代の人々総てが、栽培、漁労などによる食料確保という生活をしていたわけではない。全体からみて食料の獲得は自然物採集、狩猟によるのが、主流であったことに変わりないという説も否定できない」としている。

尚、「史遊会」では小林教授退官前年の平成一九年に、「縄文人論」の講義をして頂いている(『史遊会通信』一五七号平成一九年九月九日に概要掲載)。

さて、ここで改めて文明の発祥についてみることにする。

『縄文文化が……』を引用すると

「ヨーロッパでは 農耕・牧畜の開始により長い人類史の第一段階である旧石器時代の歴史と一線を画して、人類史の第二段階である「新石器革命」に。この新石器革命は紀元前一万年から紀元前八千年頃(二万二千年~一万年前)にシュメール(メソポタミア)で始まった」それは現在のわれわれの生活が始まったということでの第一が「食料問題」の解決であり、第二が「土器の発明」であった。

主たる食用植物の栽培化された年代・地域
 (『栽培植物の起原と伝播』星川清親著)

小麦 一万五千年前 カスピ海南岸

大麦 BC七千年頃 イラク〜トルコ地域

ライ麦(黒麦) BC三千年 トランスコー

カサス地域とトルキスタン・アフガニス
 タン地域

燕麦 BC二千二百年頃 中央アジアのアル

メニア地域〜小アジア經由ドイツ地方

また、動物の家畜化された年代・地域

(『植物と文明』解説書) 藤井純夫)

ヒツジ BC八千五百年 イラク

ヤギ BC七千五百年 イラン

ブタ BC七千年 トルコ

ウシ BC六千五百年 ギリシャ・トルコ

フタコブラクダ BC三千年 南ロシア

ヒトコブラクダ BC三千年 サウジアラビア

ウマ BC三千年 ウクライナ

アヒル BC二千五百年 西アジア

ニワトリ BC二千年 パキスタン

(註) 「農耕文化は農耕だけではなく、家畜飼養を伴った形で成立した。家畜飼養と農耕とが別々に起こったのではなく、多くの場合、

両者が有機的にむすびついた形で成立したらしい」

序でに付記すると「民族の生業形態と言語」も両者が有機的にむすびついた形で形成し成立した。

縄文文化の形成に重要な役割を果たしたと思われるのは「日本語祖語」「土器の登場(食料の煮炊用)」「犬の家畜化(狩猟用)」などで、中でも「日本語祖語」は動植物の食用の可否や収穫の多寡など生命維持にかかわる大事な伝達手段であったであろう。

民族(nation)は「文化の伝統を共有することによって歴史的に形成され、同属意識をもつ人々の集団」と定義され、「文化の中でも特に言語を共有することが重要視され」といわれる。言語は民族の形成と不可分である。小林教授は「講演・縄文人論」で「日本列島の人間の歴史は三万五千年前くらいまで遡るが十万年は越えないだろうと考えられている」と述べている。

人類史的成果品「土器の登場」については「土器の製作開始は、技術的革新性を意味し重要、画期的成果品で、歴史的意義が」。

日本の土器の登場については「炭化物の測定年代が約一万六千年前という較正值も発表

されている」(小林達雄『縄文の思考』一青森県大平山元遺跡出土土器附着)。

また「犬の家畜化」については、スウェーデン王立工科大・サボライネン博士らと米カリフォルニア大・レナード博士らの「犬の家畜化」(二国際研究グループ)によると、「犬のルーツは約一万五千年前、東アジアで家畜化されたオオカミ。オオカミのDNAの分析でそんな結果が出た」(平成二六年一月二二日 朝日新聞)。

更に「スウェーデン王立工科大の研究チームが犬とオオカミのDNAを調べたところ、柴犬と秋田犬が最もオオカミに近いDNAを持つていた」(平成二九年一月二二日 朝日新聞)。共に縄文時代草創期始め頃に符号する。

縄文文化の最大の論点、「生業」の自然との共存共生については「現代より豊かな縄文の狩猟採集生活―多種多様な縄文人の食料」として

哺乳動物

シカ・イノシシ・ツキノワグマ・カモシカ

……など六〇種以上

鳥類

キジ・ガン・カモ・ヤマドリ・ハクチョウ

……など二〇種類以上

昆虫類

イナゴ・ハチの子・キクイムシ・クリムシ・ゲンゴロウ・ザザムシ など
海獣

クジラ類・イルカ類・トド・オットセイ・アザラシ・ジユゴン

魚類

カツオ・マグロ・フグ・イワシ・タイ・サケ・コイ・アユ・ウナギ

貝類

アサリ・ハマグリ・ヤマトシジミ・カラスガイ・ハイガイ・アカニシ巻貝……など三五〇種以上

海藻ほか

海藻類・ウニ類

ドングリ類

ドングリ・クルミ・クリ・トチ

植物性

緑豆・ヒヨウタン・エゴマ、(ユリ・ゼンマイ・ワラビ・ノビル・カタクリ・きのこ類)

等が列記されている。

更に、小林教授が縄文文化の中で強く主張している「一万年以上にわたる自然と共存共生した歴史」の具体例として、食料事情を安定に導いた「縄文カレンダー」(『縄文人の世界』一朝日選書 一九九六年を一部改編)を転記すると

春 採集 ゼンマイ・ワラビ・ノビル
夏 漁労・海獣魚 イワシ・カツオ・フグ・タイ・サケ・クジラ・イルカ・トド・アザラシ

貝類・海藻類採集 アカニシ巻貝・ハイガイ・ハマグリ・アサリなど コンブ

秋

採集 クリ・ドングリ・クルミ・ノブ

冬

狩猟 ウサギ・ムササビ・タヌキ・サル・シカ・イノシシ

を中心的な食料として挙げている。

また 先著『縄文の思考』(二〇〇八年)では

「縄文時代の狩猟漁労採集は、文字通り山海の恵みを専ら享受する構えをとる。貝塚に残された貝の種類二〇〇、魚類七〇、獣類六〇、鳥類三〇種ほどをそれぞれに超え、その他に

カメやヘビや海獣を食料としていた。骨格や殻のない植物は残りにくい、それでも約六〇種知られており、実際はその五倍の三〇〇以上と見積もっても大袈裟ではない。白井光太郎が『食用植物』で挙げられているのは、キノコ類を除いて四五〇種に上る」と。

「キノコ類・ドングリ」について付記するとキノコ類

ハツタケ・アカモミタケ・チチタケ・オトメノカサ……など食用七一種 『キノコ採

りの楽しみ』(横山竜夫 内田正宏 伊沢 正名・共著)

ドングリ類

「ブナ科の木の実食べられる」(二〇〇八年一〇月二六日 朝日新聞)

落葉樹 コナラ・ミズナラ・カシワ・クヌ

ギ・クリ・ブナ

常緑樹 シラカシ・アラカシ・アカガシ・ウ

バメガシ・マテバシイ・スタジイ。

「縄文人のゆたかな精神世界」

宗教学者山折哲雄は「大昔 日本列島に棲

む人びとは 死者ができれば野のはずれや山の麓にはこんだ 骸から魂が抜けでて 山にのぼり 峠をこえて 山のカミになった 先祖になつた」(朝日新聞 平成三〇年六月二〇日)。

また「神道」について「神道(しんとう)は日本民族の形成以来、自然に対する独自の感受性をもとに、目に見えないカミの働きへの崇拜をそだてたが、開祖や教理はもたなかった。

むしろ、カミをまつり、禊、祓を行って心身を清浄にする、素朴な儀礼に基づく民族宗教であつた」(集英社『Imidas』)と定義(けて

いる。

縄文人はその生業を「自然と共存共生」、「自然はカミ」であった。日本人のユニークさの原点はここにあったのである。

とここで……

日本人は、いつ、どこから。その時期やルートについては、現代人と古代人のゲノム(遺伝情報)解析、比較を通じて明らかにする研究(ゲノム人類学)がはじめられている。

日本人のルーツについての近年の有力説は

北海道ルート 約二万六千年前

対馬ルート 約三万八千年前

沖縄ルート 約三万年以上前

(二〇一六年六月二六日朝日新聞)。

又、縄文人と現代人のDNAとの比較結果は、「遺伝的にはアイヌ人が最も近い関係にあり、沖縄の琉球人、東京周辺の人と続いた。(略)日本人が、縄文人と弥生系渡来人の混血という説が、DNA解読でも裏付けられた」(二〇一六年九月二日 朝日新聞)。

さらなる追求では「大陸から渡来した弥生人との混血が始まったのは、アイヌ人を縄文系の直系子孫と仮定すると、ヤマト人の場合、西暦三〜七世紀ごろ。オキナワ人、西暦一〇七五〜一三二〇年ごろからと推定される」

(二〇一八年七月一日 朝日新聞 Global)。

そして今、現代の生活の中にはこの国の原点「縄文文化」の影が色濃く残っているのを目にし、また感じるのである。

その最たる例が「大和国一宮大神神社」。

神とは三輪の神を言い、三輪山が御神体で本殿がなく拝殿があるだけ。その三輪山には

磐座 神霊が宿るための岩石の座位

磐境 神域、聖所の古称

磯城 石で築いた祭場

神奈備 神が鎮座する山や森

神籬 ひもろぎ 神霊が宿る山・森・老木などの周囲

に常磐木を植えめぐらし玉垣で神聖を保

つたところ

などが山頂まで点在し、古代の自然信仰を今につたえている。

続いて色濃く残っていると思われるものは

「諏訪大社の年中行事」である。

信濃国一宮「諏訪大社」は、上社(本宮・

前宮)、下社(春宮・秋宮)四社の総称である

が、その発祥の地は上社本宮であるという

(『歴史読本』二〇一三年二月号 新人物往

来社 牛山佳幸)。

近年、確実性の高い資料「阿蘇氏系図」の発見、研究から神社の起源と成立過程が明らかになってきたとのである(『諏訪大社

の御柱と年中行事』宮坂光昭)。

その「御柱」の源流は、縄文の「柱立て祭」との見解である。

また上社の祭祀形態「ミシヤグジ(御左口)

神」(巨石・樹木・リングを依代とする自然精霊)信仰は、原始・古代に起源を求められるものである(宮坂光昭並びに『歴史読

本』二〇〇二年一月号 窪寺絃一)。

元旦の特殊神事「蛙狩神事」は「蛙を生贄にしての御狩り初め(狩猟祈念)」であろう。

恒例の「御頭祭(酉の祭・古くは三月酉の

日に行われた)」の奉納品は、鹿七五頭・

猪・兎・雁・鯉・アワビ・塩エビ・ボラ・サ

メ・ヒダラ・タコ・ワカメ等。酒三石四斗

余、土器千枚が用意され「神人相嘗」の饗膳

の儀式がとり行われる。

更に付記すると、この例大祭の通称酉の祭り(御頭祭・大御立座神事・廻湛神事・神使

巡幸)は特殊神饌として鹿の頭が供えられ、

「神人相嘗」儀式のあと弓・矢による狩猟行

為を伴うもので、明らかに「狩猟呪術」であ

り、縄文時代の「風習」を色濃く留めている

ものと言えよう。

例が飛躍するが、江戸時代(二八一〇年)の「諸藩の幕府への献上物」にも縄文文化を感じる。地方各藩は吟味に吟味を重ねて、安全

で、風土と歴史の所産である古来からの伝統

色を献上したはず。生物は江戸前があること

を献上したはず。生物は江戸前があること

もあり、保存食を主とした山・川・海・里の幸の中に、縄文の食文化の名残りを見るのである。

稿末別表

「諸藩の幕府への献上物」一八一〇年
(文化七) (『図表でみる江戸・東京の世界』江戸東京博物館 一九九八年)をもとに作成

更に「縄文の文化的遺伝子」に触れたものを列挙すると

木食戒 「火の通ったものや米穀を断ち、木の実を食べて」修行すること。

またぎ 「クマ(山言葉で「イタズ」)や野ウサギなどを追う山間に居住し、古い伝統を持った狩猟民」(山々を股にかけるから説、狩の意のアイヌ語「マタク」説。)

秋田犬「日本古来のマタギ犬(狩猟犬)」がルーツ?

板額御前のこと 平山善之氏史遊サロン通信二六六号 「あたしの中には蝦夷の血が流れている。……西の者たちと違い、森を開かず、森の中で生き、獣を狩り、

その狩った獣を神として崇めながら生きる、誇り高き狩人だ。狩人は優秀な戦士でもあった」。

健康寿命 一位日本七三・六歳、二位スペイン七一・九歳、三位スイス・イタリア七一・七歳。

食品の種類の多さ(食品の多様性スコア) 一位ニュージーランド、二位日本、三位スペイン。「食品の多様性」が高いほど健康寿命が長い傾向に。縄文の影が?

築地魂 世界一の漁食文化「魚の目利き」発信基地の魚河岸、原点は縄文の漁労に。

ユーカラ(アイヌ語 物真似する意) アイヌに口承されてきた叙事詩の一。広義には、女性、自然神(カムイ)を主人公とする叙事詩を含む。
「カムイ」(アイヌ語の神。「カム」は「かみ」の古形)。

おもろ(「思い」と同源で、神に申し上げ宣り奉るの意)
沖縄・奄美諸島に伝わる古代歌謡。呪術性・抒情性を内包した幅の広い叙事詩。一二世紀から一七世紀はじめに謡われた。

ウチナーグチ(沖縄口) 沖縄語、沖縄方言。

ヤマト祖語 古代日本語—近代日本語と古代琉球国—近代琉球語に

分岐(二大方言)した。約一七〇〇年前ころに分岐がはじまったか?

ところで、現代日本人の私達は、好きな童謡・唱歌、「春の小川」「春が来た」、「夏は来ぬ」「夏の思い出」、「里の秋」「紅葉(秋の夕日に……)」、「冬の夜」「冬景色」など四季折々の情景に触れると、この国の原風景に思いをさせ、自然の恵みを感じるが、これも「縄文の文化的遺伝子」によるものであろう。

というふうには、折に触れ、事に触れ、この国日本の原風景に思いをさせ、カミ・自然を感じさせる縄文文化の姿を心に描くのである。「縄文文化が日本人の未来を拓く」はそのエピソード「自然と共生した」縄文と「自然を支配する」大陸文化で次の如く訴えている。「縄文人がムラの周りに展開するハラと共存共生を一万年以上にわたってやってきた……そういう経験は大陸側にはなかった。ただちに自然との対決姿勢に入っていく。人間が、自然と征服戦争を始める。それが西洋的歴史観につながっていく」その結果「深刻な局

面、もしかしたら核戦争が(中略)。自然の歴史が教えてくれる(中略)。われわれの身近な縄文文化から、今の時代のわたくしたちの生き方をもう一度照らしだしていく必要がある」と。

二十世紀は「西洋科学」における世界観が「機械論的」に行き過ぎ「核に収斂」され、今日われわれの社会全体が抱えている諸々の危機をもたらしたが、二十一世紀はそれが更に「地球上から、宇宙が戦場」へとエスカレートし「人類全体が生き延びられるかの危機」をもたらしているといっても過言でなくなっている。

「日本文化は今、世界的に注目を集めている」のは実は縄文文化の「自然と共存共生」その中で育まれる「自然に備わる人間の愛情」なのでは……。「個々人の世界観の変革は、人々の生き方の変革に直結し、それはまた社会全体の変革へと展開されていく」そのきっかけにとの「人類の希望」の深層の現われなのではないかと思うのであるが？

参考にした主な文献

縄文文化が日本人の未来を拓く

小林達雄 徳間書店 二〇一八年

縄文人論(講演)

小林達雄 史遊会通信一五七号 平成一九年
 縄文の思考
 小林達雄 ちくま新書 二〇〇八年
 季刊邪馬台国 第一三四号 日本人と縄文文化 梓書院 平成三〇年
 縄文以前の日本列島の謎
 井口一幸・蜂矢敬啓 高文堂出版社 平成一二年
 縄文学への道
 小山修三 NHKブックス 一九九七年
 文明に抗した弥生の人びと
 寺前直人 吉川弘文館 二〇一七年
 植物と文明―解説書
 藤井純夫 岡山市立オリエント美術館 一九八二年
 栽培植物と農耕の起源
 中尾佐助 岩波新書 一九七七年
 沖繩一千年史
 眞境名安興 栄光出版社 昭和四九年版
 沖繩語辞典
 内間直仁・野原三義 研究社 二〇一二年
 グリーンアドベンチャー・野草編
 森田勇造 青少年交友協会 昭和六二年
 グリーンアドベンチャー・樹木編
 森田勇造 青少年交友協会 昭和六一年
 キノコ採りの楽しみ 横山竜夫・内田正宏・伊沢正名 永岡書店 一九八九年

諏訪大社の御柱と年中行事
 宮坂光昭 郷土出版社 二〇〇三年
 図表でみる江戸・東京の世界
 東京都江戸東京博物館 平成一〇年
 一宮巡礼の旅
 入江孝一郎 みくに書房 一九八八年
 原始の神社をもとめて 日本・琉球・済州島
 岡谷公二 平凡社 二〇一七年
 パラダイム・ブック
 C+Fコミュニケーションズ 日本実業出版社 昭和六二年
 レヴァント初期農耕文化の研究
 藤井純夫 岡山市立オリエント美術館 一九八一年
 栽培植物の起源
 田中正武 NHKブックス 昭和五一年
 栽培植物の起原と伝播
 星川清親 二宮書店 昭和五三年

諸藩の幕府への献上物・1810年(文化7) (『図表でみる江戸・東京の世界』江戸東京博物館 1998年)をもとに作成

	陸奥・弘前 10万石・外様	陸奥・平 5万石・譜代	越後・長岡 7万石・譜代	信濃・高遠 3万石・譜代	相模・小田原 11万石・譜代	尾張・名古屋 61万石・親藩	丹後・宮津 7万石・譜代	出雲・松江 18万石・親藩	伊予・宇和島 10万石・外様	筑前・福岡 52万石・外様	薩摩・鹿児島 71万石・外様
1	塩 鯺	鱒	塩		長鮑樽	長鮑樽	鯿	鯛	(色,鳥子紙) 宇和鯿(スルメ)		鏡菱餅 生鯛
2			鮭披(ヒラキ)		粕漬鮑			十六島海苔			鯿(スルメ) 昆布樽
3			塩甲鰯	信州芽独活 (ウド)		長鮑樽			(博多織帯)		
4			鯛細腸			志筑節 (シツキカマス)	鯿(カレイ)目刺 (袴地)	生肴			丸熨斗、香餅 (寿帯香、龍涎香 長寿大官香)
5		浮亀 (マホウ)	干鯛			鮎酢 上条瓜				氷砂糖	
6	(立駒)	浮亀	漬蕨		粕漬小梅 干鱈	氷餅、鮎酢 上条瓜	(縮緬)(チリメン) (縮)(チヂミ) 葛粉	隠岐串鮑	串鮑	博多素麺	
暑中	煎海鼠(イロ)			信州寒晒蕎麦		品不定					(琉球布)砂糖漬 天門冬、赤貝 塩辛、泡盛酒
7		鮭	刺鮭			鮎酢 上条瓜				干鯛	蓮飯 刺鮭
8	漬蕨	鮭	初鮭 二番鮭	信州松茸		鮎酢		真梨子 大場梨子		切熨斗鮑	国許の干肴
9			鮭細漬		里芋	甘干柿 美濃柿			宇和鯿	干鯛 (丁香、龍腦) (博多織縞)	干鱈残魚 (ホシロウオ)
10	(巢鷹)		子籠鮭			甘干柿 美濃柿	白藻(シラモ) 鯿(フリ)	茶 鯛、鶴	宇和鯿	博多煉酒	琉球煎海鼠 (イロ)
11	塩引鮭		鮭筋子		甘鯛披	茶、水菓子類 生肴樽 宮重大根					
12	塩鱈	鮭鱈(アノウ)	鮭塩引 (立駒(隔年))			干細魚、鯛腸 塩辛、粕漬鮎 うるか、枝柿 雁、鶴		鯿島鯿 (トシマフリ)		牛蒡 老海鼠(ホヤ)	桜島蜜柑 焼鮎
寒中	串鮑	雉子		岩茸	蜜柑				干鯛		琉球油 七島鯿節